

はじめに

教育研究を宿命づけられている附属学校には、それぞれの歴史と風土の中で、先達が残してきた哲学や教育観が存在します。そしてそれらは、現役の道標になるとともに、学校の研究を特徴づけてきました。

附属長岡小学校の研究誌を紐とくと、“子どもを発見した”という印象的な言葉が目にとまります。

「わたくしたちが当面したのは、“子どもを発見した”という、教育の基本に対する素朴な再認識であった。

つまり、授業には、思考し、表現し、ものをつくっていく子どもが厳然として存在しているという事実であり、

わたくしたちの新しい探求は、この事実を重視して追求されなければならないということであった。」

(『動く授業過程の探求』昭和45年研究紀要より)

この“子どもの発見”という言葉は、常に新鮮な感覚で私たちの心の中に鳴り響き、時に慢心する気持ちを諫め、また時に曖昧模糊とした状況に一筋の光明を見出してくれます。「授業には、思考し、表現し、ものをつくっている子どもが厳然と存在する」という子ども観、授業観、そして目の前の事実を再認識・再確認し出発しようとする研究態度は、今でも連綿と引き継がれています。

「創造的な知性を培う」は、幼・小・中をつらぬく連携主題として平成16年より掲げてきたもので、本年度は第2次研究の2年目にあたります。その内容は、「学ぶ意欲」「知識・技能」「思考力・表現力・判断力」の関係性を、附属長岡小学校独自の視点と実践から検討し、広く一般校に敷衍しようというものであります。昨年は、「知識・技能」の習得・活用の連続性について、「更新・再構成」をキーワードに、その内実を明らかにしてきました。「知識・技能」の習得・活用へと結び付く授業は、子どもの興味・関心を原動力とした問いの連続の中で、見方や考え方をとらえ直し、学んだ内容を関係づけ、表現していくという動的かつ創造的な営みでした。本年度は、授業における活用の様相をさらに探究し、個のこだわりや追求傾向を授業においてどのようにとらえ位置づけるのか、教師の働きかけはどうあるべきか、といったことを明らかにしています。参会者の皆様からは、それぞれの教員が、本日の授業でどのように「活用」の実際を提案していくのか、ご覧いただきたいと思えます。

授業者としての教師の日々は、時に苦しいものですが、課題解決場面における子どもとの創造的なやりとりは楽しく、教師としての醍醐味を味わう瞬間でもあります。“子どもを発見した”という先達の言葉に倣うならば、私たちは今回の研究を通して、“授業を発見した”という、教育の基本を素朴に再認識したのだと思えます。授業は、教師と子どもによるきわめて創造的な営みであり、子どもの学び直しを連続して実現することでした。この意味を今一度噛みしめ、前進したいと思えます。

最後になりましたが、これまでご指導ご援助くださいました皆様に、心よりお礼申し上げます。

新潟大学教育学部附属長岡小学校 校長

伊野 義博